

第8回 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会 議事概要

1 日 時 令和5年2月17日(金) 10:00~11:40

2 場 所 パレブラン 高志会館 嘉月

3 委員出席者 金岡 克己 牧田 和樹 伊東 潤一郎 稲田 裕彦
尾畑 納子 河上 めぐみ 近藤 智久 白江 勉
白江 日呂雄 鈴木 真由美 本江 孝一 松山 朋朗
本島 直美
アドバイザー 大島 まり

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

議事事項

○ 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方に関する報告書(素案)

事務局から資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(委員長)

アドバイザーの先生から、ご挨拶を一言よろしくお願い申し上げます。

(アドバイザー)

いただいた報告書を読みました。いろいろな観点で分析もされて、非常によくまとまっていると思っています。少子化の影響が、いろいろな意味で課題になっていることの危機感をこの報告書を通して理解することができました。そういう厳しい状況の中で、令和の日本型の教育ということで新学習指導要領でも言われているような個別最適の学びや協働的な学び、ICTの活用などにも積極的に取り組んでいるということで、非常に素晴らしいと思って拝聴していました。

詳細に関しては、後程述べさせていただけたらと思います。

(委員長)

それでは早速、皆様からご意見を賜りたいと存じます。今回のこの素案をもって、パブリックコメントという形になると思いますので、忌憚のないご意見をいただきたいと思います。最初6名の方にご発言いただき、アドバイザーからアドバイスをいただいた後、また残り6名の方にご発言いただくという形で進めさせていただきます。

(委員)

多様な観点からバランスよく報告書がまとめられていると感心して拝見しました。

あとは、この報告書を学校現場でいかに具現化できるかが勝負どころだと思っています。例えば、7ページに実効性のある取組みの推進等が書かれています。高校からの情報発信という視点もありましたが、情報発信だけではなく、子どもにとっても繋がっている小中高が、いかに連携していくかという視点もあれば良いと思います。砺波市では、幼保小中においてその取組みをしており、小中については以前にも紹介させていただきましたが、校区の小学校の授業を中学校の教員と一緒に参観し、協議会も一緒に行い、方向性を検討しています。

そこで、これを中高でできないかと思っています。2月14日の内外教育の中で、埼玉県の戸田市の教育長が「子どもたちを一流の地域人に」ということを書いていらっしゃいました。少し紹介すると、令和時代の地域とともにある学校づくりはどのように行えばよいのかということで、カリキュラムマネジメント力を発揮し、子どもたちが地域を理解する活動を通じて、地域社会の課題を自分ごととしてとらえ、提案し、解決する課題解決型の学習PBLにより、学校と地域社会との関係性を築くことが可能であるということ。そして、それが子どもたちを地域人とするために極めて重要であるという学校を核とした地域づくりについて書かれていました。幼保小中から子どもたちが探究的な学びを通して地域を考え、現在高校の方でもしていただいています。こういったことを連携していくことはできないかと思っています。そこで提案なのですが、例えば、中学校3年生の授業を高校の先生と一緒に見て、協議をする。或いは逆に、高校1年生の授業を公開して、中学校の教員が参加するというように連続性をさらに高めていくことができれば、大変ありがたいと思います。

(委員)

第7回までのいろいろな意見を取り入れられて、大変素晴らしいものになっていると感じました。

私から2点お話いたします。富山県知事の方針としてウェルビーイングの向上という話があり、その中で誰一人取り残さない社会を作るという考え方が、4ページに載っています。誰一人取り残さないということは、学力層や人間力層に関わらず、誰もが社会にきちんと参加して役に立っていくことが、これから人がいなくなっていく中で重要だと感じています。そういう観点から見ると、ある程度人間力や学力がある層に対する考え方については、この中に非常によくわかりやすく示されていると思いますが、そうでない層という言い方が適切かはわかりませんが、この文章を読み、そういう層に対する社会参加や社会に対する役割を教育していくという考え方がないのではないかと感じています。もちろんいろいろな力をつけていかなければいけません。例えば学力一つにして、得意ではない子に対してどういう教育をしていくかという部分が少し欠けているのではないかと感じているので、その辺のところを間に合うのであれば、もう少し付け加えていただくとよいのかと思います。

もう1点は、多様な生徒への対応という点についてです。これから先、人が減っていく中で、例えば製造業などは外国人のエンジニアといった人たちを受け入れる形になっていくと思います。そうすると実習生や研修生の場合だと本人が日本に来て働くというだけで、エンジニアの場合は長期間日本に滞在して、子どもを含めた家族を連れてくるとい

うこととなります。その中で、いい人材を確保するには子どもの教育環境が整っていないとなかなか良い人材を採るのは難しいということが実際あり、例えば福井県や愛知県などはそういった外国人のご子息を受け入れる高校ができていますが、そのようなものが必要ではないかということを感じていますので、それも間に合うようなら、そういう生徒に対応する学校のあり方をご検討いただければありがたいと感じています。

(委員)

報告書は、非常によく細かいところまでまとめられていて、知りたいこともしっかり書いてあると感じています。私からもいくつかご意見させていただきます。

情報発信という言葉と多様な生徒に対応するという言葉があるのですが、そこをうまくリンクさせる、つまり学び直しをしたい生徒や先ほど話に出ていた外国の方がどのようにして学んでいくかといったニーズに対して、どのようにその言葉を届けていくかということがもう少し入っていると良いのではないかと思います。

また、職業系専門学科の取組みなどは非常に具体的で、それを目指す方々に見ていただければ、良いイメージというか具体的なイメージが湧き、そこを目指そうということになるのではないかと思います。

中高一貫校といったところに関しては、まだこれから議論を進めていくことになると思います。中高一貫校がないという県が、富山県とあと1県しかないということですが、富山県の教育事情もあると思うので、メリット・デメリット両方をしっかり抽出していただいた上で、検討していただければと思っています。

あとは、本文とは直接関係ないかもしれませんが、今回この検討をするにあたり、いろいろなアンケートをしていただきました。それが非常に興味深かったのですが、ぜひ追跡調査をしていただきたいと思います。今回は現在の生徒の声などを聞いていますが、「卒業後にどのような感じ方をしているか」、「その当時学んだことをどう生かしているか」といった長期的な追跡調査をしていただきたいと思っています。

最後に、ICTの利活用という言葉がよく出てきています。コロナのこともあり、タブレットを生徒一人一人に渡すというハードはそろっていると思いますが、どうやって運用していくか。今後、教科「情報」も入りますし、情報リテラシーについてもすでに教育はされているとは思いますが、そういった観点がどんどん重要視されていくと思うので、そこに関してもこの報告書とは別に考えていただければと思います。

(委員)

これまで話し合ってきた内容を綺麗に整理されて、改めてこういうふうにして流れてきていたということがわかりました。

4ページに3つの目指す姿があります。この目指す姿と次に出てくる6つの方向性や取組みとの関係性のようなものがわかるように、うまく有機的に結びつくような書きぶりにする工夫をしていただくと関係性が非常によくわかるようになるのではと思いました。

それから、今回はいろいろな検証をしていただいて大変良かったと思っています。先ほどの委員からもあったように追跡調査をしていくということが大事だと思っています。そういう意味で、総合学科がどうだったのかということ疑問に思っています。今後それぞれ

の学科で人数が少なくなっていく中で、総合学科をどのようにしていくのかということも、この報告書に盛り込めるかはわかりませんが、触れていただけたらと思っています。

4章の配置の問題にもっていくために、全体があるような感じがしていますが、多様な教育環境を次年度以降、種々検討していただくということなので、ぜひ期待をしています。富山県から出て行くのを黙って見ていないで、富山県に受け入れるというような、少しアグレッシブな体制があってもいいのではと思っています。26ページに全国募集ということも書いてありますので、ぜひそういった観点も取り入れながら、少しでも実現できるような体制を今後、整えていただきたいと思います。

最後に、40人1クラスということで、どんどんクラスが減っていくということに対して、40人で従来のようにいけるのか、もう少し1クラスあたりの人数を少なくして、充実した教育環境を整えるように国へ働きかけていくことも、今後必要ではないかと感想として思いました。

(委員)

9ページの教職員の資質向上のための研修における下から4行目に、「社会の変化について学ぶ研修」とありますが、具体的に何なのだろうと思いました。社会の変化に応じて柔軟な研修を受けることの方が大事なのかなと感じました。

また、教職員が主体的、継続的に学び続けることができる環境整備とは具体的にどのような環境整備なのかと疑問を感じたところです。

次に27ページでは、学区について書かれていますが、学区については公共交通が必須になるので、交通政策を担う関係部門との連携を図るといったようなこともあればいいのではと思いました。

(委員)

これまで回を重ねていろいろ議論してきた意見が全体としては反映されてきたと思っています。

4ページにⅠ、Ⅱ、Ⅲと目指す姿が3つありますが、Ⅰの「生徒の可能性を引き出し、自分らしく」という文言は「個」のこと、Ⅱでは「協働」という言葉、Ⅲでは「よりよい社会を築こうとする」という社会への貢献といった視点があると思っています。これらは、全体を通して貫いている理念なのですが、報告書の学科ごとのページを見た時に、例えば水産科、工業科、農業科といったところで、最初のリード文について学科によって書きぶりがまちまちかなと思っています。「個」について中心に書かれている学科があれば、「社会貢献」を中心に書かれているところ、「協働性」を中心にというところもあります。それぞれの学科が目指す理念は当然あるわけですが、冊子として見た時に、学科ごとのページでも3つのポリシーが少し浮かび上がるような形になっていても良いのではと思っています。前回のA3で1枚にまとめられていた概要版では、一目で一つ一つの取組みと目指す姿が結びついて非常にわかりやすかったように思います。各学校の先生方はこの報告書を手にとられ、自身の学科のところを見て、これを基にしながらいろいろ工夫、或いは各学校での協議・検討ということになると思いますが、それぞれの学科のページのリード部分で、目指す姿との接合がわかるようになっていけばよいと感じました。

それから7ページのリードのところ「新たな学びのための学校の形態・仕組み等の」とありますが、かねてより申していた中高との連携といった校種間連携や学校間連携ということ意識したような文言が入ると良いのではと思って拝見していました。

もう一つ、これはなかなか書きにくいところではないかと思いますが、6ページの魅力と活力ある学校づくりを推進するための教育環境の整備についてです。どちらかということに書かれているのは物に特化されているように思いますが、通常、学校経営・運営を考える時に人・物・金ということがあります。先ほどからも話題になっていますが、多様な生徒への対応について、現在、各高等学校では外部人材の活用や専門家の活用ということが十分なされていると思うので、人も教育を支える環境の一つと捉えれば、せっかく取り組まれていることをさらに充実・推進していくよという意味で、加えても良いのではと思っています。

(委員長)

6名の委員の方から意見表明がありましたが、ここでアドバイザーからご感想なり、アドバイスがあればお願いします。

(アドバイザー)

貴重なご意見を拝聴させていただき、ありがとうございます。2点ほど感想というか、コメントさせていただきたいと思います。

対策については今後考えると伺っていますが、一番の課題となっているのは、小規模の学校が増えていくということと、そこでいかにクオリティを保ちながら、また保つだけではなくさらに発展させていくという非常に挑戦的な部分が課題なのではないかと思っています。

1点目ですが、先ほど学校間連携が出てきていました。その学校間というのは、高校だけではなく、中高も含めた学校連携というのを進めていただくことは大事だと思っています。

それに加えて、現在、一人1台の端末が整備されICTもかなり普及してきたので、例えばオンラインでICTを通して、学校でお互いに授業に参加するといった試みなどを行うことにより、空間的・距離的には離れていますが、うまく連携ができるのではないかと思います、ぜひ試してみるといいのではと思います。

2点目です。小規模の学校が増えるとともに、教員の問題というのも非常に課題になると思っています。最近、総合的な探究の時間や教科「情報」など、今までとかなり異なるような科目を教えなければいけないという状況も出てきていると思っています。現行の学習指導要領では社会に開かれた教育課程ということも謳っているのですが、ぜひ外部人材の登用を考えていただくと、教える方も少し違う視点で生徒を見ることができたり、参加される外部人材の方にとっても新しい気付きになったりするのではと思っています。なかなかこれをシステム化するというのは難しいということは重々承知していますが、ぜひそういう外部連携というものも積極的に取り入れるといいのではと思って聞いていました。

(委員長)

それでは、残りの6名の方のご意見を伺いたいと思います。

その前に、これまでの議論と違うのではないかと少し記述が気になったところがありましたので、記載の訂正をお願いしたいと思います。

23ページの定時制・通信制の(イ)「今後の取組みの視点と目指す方向」の下から2番目です。「定時制・通信制の定員割合については、多様な生徒を受け入れることから、募集定員を維持することが望ましい」というところです。私の記憶によると、定時制・通信制については、多様な生徒の受け皿として重要であるというお話はありましたが、募集定員を維持するという話はなかったと思います。むしろ1人の委員の方から、現在の募集定員900数十名に対して在籍者が少なく、定時制は平均すると4年ですから、4倍のキャパシティをもって募集されている。そうするとそれだけの人的リソースをかけていることになり、それはいかなるものかというご提言がありました。そして最後の委員長のまとめとして申し上げたことは、特別支援学校については、大変手厚い教育支援が提供されており、これは県民の皆様ほとんどがご存知で、コンセンサスを得ているでしょう。一方、定時制・通信制については、委員の皆様もほとんどご存知ないことなので、県民の皆様はわかっておられないのではと。その中で、どれだけの教育資源、教員の数、或いは予算を充てているか、具体的な数字なり、教職員の方、或いは予算でもいいのですが、それを明らかにして、県民の皆様のご意見を聞いていただきたいというまとめにさせていただいたと思います。従って、ここに書いてあるような「募集定員を維持することが望ましい」というような議論ではなかったと記憶していますので、できればこの2行を削除していただきたい。もし、これを残したいということであれば、例えば「これは教育委員会としての独自見解であり、この委員会での議論の方向ではありません」ということを明記していただきたいと思います。

それでは残りの6名の皆様から、忌憚のない意見をお願いします。

(委員)

アンケートの結果から、学校案内やオープンハイスクールなどで高校に関する情報を得ることが多いと書いてありました。オープンハイスクールには子どもたちが見て触れて興味を持って高校を選ぶという面があり、オープンハイスクールはとても大事だと思っています。オープンハイスクールは、学校が休みの時に行われていると思います。これは案というか、このようなものがあつたらいいなということなのですが、授業参加のように子どもたちがその高校で楽しく勉強しているところや楽しく実習している姿、頑張っているところなどをオープンハイスクールの中で見ることができ、高校を選ぶ一つの理由になればいいと思いました。部活動では、体験型ということで参加して、興味を持って選ぶということがありますが、そういった学校の姿、学校の生活における子どもたちの日常を見せることで、高校を選ぶ理由の一つにもなるのではと思っています。オープンハイスクールについて回数を増やしてほしいとか、2年生の時からやってほしいとかいろいろなことをこれまで言っていますが、こういった一工夫も二工夫も中身を濃くすることも実施する上ではいいのではと思いました。

(委員)

私は、富山県にある進学校の高校に行っていたので、大学に入るために、「この成績ならこの大学に入れる」という基準で選んだり、日々のテストの点数でいろいろな学びを進めたりしていたと思います。今回、高校の学びは、学力や偏差値ではない生徒の生き方、能力を育むところを重視するような取組みが書かれていたと思いました。それは素晴らしいと思いながら、それに対する生徒への評価は、学力の場合は〇×のように点数でわかりますが、そうではない学習の場合は授業への参加の意欲や課題解決能力をどう測るのかによって、先生側の生徒への教育の仕方も変わっていくと思います。

5ページにある先生の資質向上については、もちろん先生にそれをすべて任せることもありますが、学力ではない部分の向上に対しては、外部の専門家に積極的に入っていただくこともよいと思います。生徒がテストのための勉強ではなく、何のために課題解決への意欲を持って授業に取り組むのかということについて、大学では単位が取れる、こういう繋がりができるなど、いろいろあると思いますが、高校でも生徒が頑張ろうと思う評価の仕組みや教育の先にあるものを見せられる記述もあればよいと思いました。具体的には、その高校で、もしくは専門分野を学ぶことによって、どのような仕事や職種につながるのかということです。とても多くの職種がありますが、そもそもそれを知らない、もしくは興味がない場合は出会わないと知ることはありません。仕事や職種を知らせることは、おそらく学校の先生ではないと思います。地域にある仕事の具体的な内容には、農家の場合、有機農家や水産業もあれば、一次産業もありますし、他にもITなどのいろいろな仕事があります。その仕事は、どの高校に行ったら繋がるのか、何のためにそこに向かうのかということが高校を選ぶ際に、高校に行った後に大学進学やそれ以外に起業してベンチャーという可能性もあるように、こういう仕事があるということを、高校生の頃にこそ、見せられたらよいのではないかと思います。この高校に行ったその先、偏差値などではない仕事や生き方や職を、それぞれでもっと具体的に見せるために、なるべく具体的に書くことよいと思いました。

(委員)

まず、高校教育のあり方について、教育大綱や教育振興基本計画など県の指針が大きくあるわけなのですが、それに基づいて本県の高校がこういうふうを目指していきましようということがしっかり書かれており、良かったと思っています。また、高校のあり方、特色としては、学科が多数あるので、こういう取組みをして今後このようにしていこうというところも、良かったと思っています。

一方、アドバイザーからもありましたが、子どもたちの数が減ってくる中で、こうした目指すべき方向をどのように実現するかということについては、学校の規模や教員の確保ということが大きな問題で、この報告書の中にはこれからも考えなければいけないテーマとして、普職比率や公私比率、学区のあり方、これは生徒が通う高校の範囲を決める意味と募集定員に関してバランスよく高校を配置するという考え方がありますが、また、様々なタイプの学校・学科などの検討などがあり、これらは引き続き検討するという事になっています。もちろんその通りなので、まとめのところにありますが、令和5年度以降なるべく速やかにこの点について検討していくという、とても大きな課題が残っているとい

うこともこの報告書から読み取れると思いました。

細かいことで言うと、この後これをパブリックコメントに出されるということですが、かなり教育の専門用語に近い言葉が結構入っていると思うので、一般の方を想定して脚注のような形を少し入れていただけるとわかりやすいと思いました。

例えば、8ページの1(1)の2行目に、「三つの方針(スクール・ポリシー)を公表しています」とあり、そのうちの1つのカリキュラム・ポリシーが紹介されていますが、三つの方針と言われたら3つとは何かとってしまうので、脚注を入れていただければありがたいと感じました。

もう1点は、先ほどの委員からもありましたが、今回はA3の概要版を基にして我々が議論したわけですが、その概要版は一目で見て全体像をつかむ上では非常に良い資料であったと思います。可能ならば、概要版が1枚あると良いのではないかと感じたので、ご検討いただければと思います。

(委員)

報告書については、若干の齟齬はありますが、この委員会で議論された内容が反映されていることと、現状の教育のあり方、高校のあり方をきちんと認識した上での多様な取組みをされようという意欲を非常に感じられる報告書になっているように感じました。

そもそもという話になるかもしれませんが、もしかすると委員会の冒頭で言わなくてはいけなかったことがあります。この方向づけは、確かに現時点ではよろしいのかもしれませんが、この方向のあり方はおそらく4、5年で色あせてしまうと思います。なぜなら、この委員会でも議論が何回かされているように、生徒数が本当にぎりぎりのところで今、踏ん張っています。これが10年後には大きく減少することははっきり分かっているのに、この報告書では明らかに齟齬が出てしまい、機能しない、そういうものになっていると思います。

そのことについて、文部科学省は大したことを言っていないので、それは仕方のないことかもしれませんが、この報告書が機能するのは、少なくとも3年か4年後までだと私は思っています。そこから先はどうするのかという話になってくると、この3年から4年の間にそこから先の部分を準備しなければならないのではないかと思っています。その部分について、もう少し考えているところがあつたら、非常によいと思っています。

これまでもこの委員会で議論されていますが、高校の再編統合や、学校数を減らすことなどの議論は、おそらくこの報告書の方向性であれば、今の半分の高校にしなくてはいけなくなるので、「魅力ある」、「特色ある高校づくり」という言葉があちこちにありますが、おそらく10年後には「特色ある」なんて言っていられなくなると思っています。それは、いろいろなリソース、教育のリソースなどを考えていくと、それらをいかに共有するかという議論を本当に進めなければならないと思っています。「魅力ある」と言っている場合ではないという状況になってきます。

その視点がおそらく全くないか、国が全くそういう方向性を示していないからなのかもしれませんが、県のレベルでどこまでできるのかと思っています。そうなってくると、学科の壁や職業科、普通科などが議論されていましたが、そのような些末なことの議論や、高校間の壁や高校間の連携などを言っている場合ではなく、高校は相互乗り入れしなければ

ならないと思います。もう連携どころの話ではありません。

もう一つは空間の壁です。人口が多いところと少ないところ、生徒数が多いところと少ないところということで、多分 10 年後ぐらいは全く違う景色になっているかと思いますが、そういう空間の壁をいかに取り払っていくかという視点がほとんどないと思います。報告書は現在のこの方向性で良く、実にいい内容になっていると思いますが、そこからさらに先をどうするのか、ビヨンドスリーイヤー、フォーイヤーというところですか。何か考えているところもないと、委員会の人たちは何をしていたのという話になってしまうので、私はその 1 点だけを提言したいと思います。

今 ICT などのいろいろな技術があるので、授業をリモート状態にするのか、先ほど外部の専門家の方々をいわゆるカリキュラムに入れるといった話がありましたが、そういう議論がいろいろなところで有機的に繋がっていくと思います。

また、誰一人取り残さないという言葉がありましたが、そういう議論をするためにも、いろいろな壁を取り払っていくことが、もしかしたら、今後の教育の 10 年後ぐらいの教育のあり方の一つの流れになるのではないかと思います。だから今の割と満たされた状態、今でさえ高校が再編統合されて少なくなっているのに満たされていないかもしれませんが、今のこのぬるい状態を想像して魅力ある高校づくりと言っても、多分、全く絵に書いた餅になってしまうということを申し上げたいところです。

(委員)

この報告書の感想として、これまでの議論或いはアンケートの分析に基づいて、本当に丁寧に様々な観点からまとめられています。

2 ページのグラフでは生徒数が激減、大体 5、6 年で 1,000 人が減ります。この点線の部分を想像すると、中学校もぞっとするような減り具合です。少子化に対する危機感はこのページからでもすごく感じられます。

県立高校の今後の学科、規模、或いは配置など、これから具体的な議論に進んでいくと思います。中学校としては生徒が直接進学するわけですので、様々な形で、また、どのような段階であろうとも協力してまいりたいと思いますので、その点を念頭においていただければと思います。

(委員)

この委員会のタイトルが「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方」です。誤解をしてはいけないことは、令和の魅力と活力ある県立高校「教育」のあり方ではないということに、実は最近気づきました。そうであれば、この報告書のメインは、第 4 章になると思います。先ほどの委員からもありましたが、今後、ドラスティックにいろいろなことが変わっていくのだらうと思います。それに向けて、県立高校はどういう規模で、どういう配置をすればよいのか、問題提起をこの報告書でできればよく、そこに意図や狙いのようなものを感じるので、この報告書は現段階ではよいと思います。要するにこの後、考えていかなければいけない、こうしようという問題提起を含めて、この後の議論につなげるという意味での報告書としては非常に有効だと思っています。

ただ、先ほど申し上げたとおり、これはあくまで県立高校が主役の報告書ですが、我々

は、少なくとも高校に通っている生徒、並びにもっと大きな視野で捉えていくと、富山県の人材をどう育成するかという大きなテーマを抱えています。そういう観点から、この報告書に足りない部分は、先ほど複数の委員が仰ったような視点が入ってくるのだろうと思っています。そのような意味では全く未完成の報告になっていると感じています。

正直なところ、県立学校について今後そのようなことを踏まえ、富山県の人材育成や教育についてももう少し深く考える場をどこかで提供をいただけるとよいと思っています。

(委員長)

最後に委員長まとめがありますが、その前に少しだけ今の皆様の意見を聞いて思ったことを申します。

重要なことの一つとして、飲食店での不適切な事件が起きました。あれは他県の高校生とのことですが、結局、高校にものすごく負担をかけたということで自主退学されたようです。2月10日には富山県の高校生も、飲食店のガリを直接食べたということで、これも大問題になっています。

忘れてならないことは、成人年齢が昨年4月から18歳に引き下げられ、国政の選挙権が大分前に18歳になっていることです。つまり、高校在学中に成人年齢に達する方がいらっしゃるということです。この事実と、いまだに校則が問題だと言っているギャップが大き過ぎます。高校生は、高校時代にもっと社会課題に接しないと国政の選挙権を持ってどうするのかということに関して、教育界だけではなく、社会全体が考えなければならないのに、何か閉ざされた空間として、これまでのものとしてだけ捉えられているのではないかと思います。校則については、「自主的に制服をこのように決めました」「いいですね」とマスコミの方も賞賛していますが、それは中学校レベルの議論であれば分かります。

18歳が分別ある大人として扱われ、法律体系もなってきたにも関わらず、高校は非常に中途半端な時期ですが、それをどのようにして過ごしていけばいいのかが先ほど複数の委員からあったとおり、ただ教育カリキュラムをどうするのかというような狭い枠組みの議論にとどまっているのではないかと思います。非常に残念な気がします。世の中が変わっているんで、先ほど述べた事件もそうですが、これが大学・短大生であればおそらく「もう成人であるので、学校は関係ない」で済まされますが、高校となると非常に微妙です。高校の方が、必ずしも謝っていらっしゃるわけではありませんが、世間から見ると高校生が何か問題を起こしたら、その学校も当然謝罪なり何らかの対策をとるべきだというのはまだ日本人の共通感覚だと思うので、大変立派な報告書を作っていただきましたが、そういう世の中・社会との関わりについての議論が、かなりの部分で欠けているのではないかと思います。

先ほど総合学科の話もありましたが、総合学科では「産業社会と人間」を最初に教えて、育成を考えさせるということでした。例えば、農業であれば、日本においては今このようなステータス、世界的にはこうだと、その魅力を伝えていくというようなものの考え方が、カリキュラム上に反映されていないのではないかと思います。

先ほど複数の委員が仰っていましたが、それを今後の課題としてどう繋いでいくか。ですから、今後残された課題をもう少し広く書いていって頂かないと、これまでの従来10年前、20年前の高校のあり方で検討していた報告書のあり方という意味では素晴らしい報告

なのでしょうが、今の時代に本当に沿っているかという点、私も疑問に感じるところです。まとめの前に個人的意見を述べさせていただきました。

それではここまでの議論を踏まえて、またアドバイザーからアドバイスをお願いします。

(アドバイザー)

皆様、非常に様々な観点から、また示唆に富んだいろいろな議論を興味深く拝聴しました。先生方が仰ったことは本当に大事なことで、時代が変わっていく中で、教育もどうやって変わっていくかということは、おそらく富山県だけではなく、そして高校だけではなく、大学にも課された非常に重要な課題だと思っています。

1点、全然違う観点からですが、本日の議論もそうなのですが、富山県は非常に教育熱心で、富山県の良さが多くあると感じています。課題を解決することは大事だとは思いますが、一方で富山県が持っている良さや特徴を伸ばしていくということも非常に大事だと思います。報告書を読んでいると、比較的今の重要な課題だけを書かれているようなところもあると思います。

報告書としては非常にまとまっているので、ここからまた付け加えるとなると大変と思いますが、できれば課題だけではなく、富山県の良さや現状の特徴的なものなどを少しまとめていただくと良いと思います。課題だけだと夢がなかなか見い出せないということもあります。良さを生かして、さらに一方で課題も解決していく前向きな姿勢が大事だと思います。良さや特徴も一言二言でも結構なので、入れていただくと良いと思いました。第1章の「県立高校教育を取り巻く現状」で、先ほど申し上げたように課題が書いてあるのですが、富山県だけが持つ良さをここに書いてもいいのではないかと思います。

(委員長)

ここでご欠席のアドバイザーからもご意見を頂いているそうなので、事務局の方からお願いします。

(アドバイザー)

まず、第2章と第3章で、県立高校の学びの改革と魅力と活力ある県立高校のあり方に関してその方向性が整理されています。

1. 第2章冒頭のウェルビーイングの概念について。この概念は、国の最近の政策文章でも用いられており、県の第3期教育振興計画でもすでに採用されています。この意味では詳細な説明を要する概念ではないのかもしれませんが、しかし、抽象的な概念であり、必ずしも含意が明瞭というわけでもなく、論者や機関によってばらつきがあります。説明や出典等について明記して、概念内容を明確にしておけばよいと思います。

2. 第2章2 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す学びの変革について。小中学校と比べると、高校での学びの改革は格段と言ってよいほど遅れている現状があります。ICTの活用に関しても、公費によって1人1台端末が整備された小中学校と比べると、高校での活用状況には遅れが見られます。その点についても触れていただきたいと思います。

3. 第2章2 IIIのICTの活用による学びの充実の推進、および、第3章1の(2)に関して。ICT活用が単に機器を活用することを奨励することにとどまらず、デジタル読解

力やデジタル世界でのリテラシーを高めることが重要、必要になっていることを強調してほしいと考えます。

4. 第2章及び第3章。県立高校のあり方に関するアンケート調査を参照すると、生徒たちは「大学等へ進学し基礎となる学力」を重視しています。このことは、県立高校改革、学びの改革において、進学準備教育は引き続き重視し、進学希望に応じていかねばならないことを示しています。それは普通科だけでなく専門学科でも求められている点です。ただし、進学準備教育を重視することを受験目的に特化した効率的な学習と理解することは危険であり、誤った方向性です。より重要なのは、大学へ進学してから、或いは社会に出てから、有益な学問的知識、スキル、思考力等の基盤をきちんと作ってやることであろうと思います。

5. 第2章と第3章、特に第3章の探究科学科について。高校教育改革において、探究的な学びが重要であることは論を待ちませんが、探究的な学びをする際に、最も大きな障害となっているのは、そもそも高校卒業まで探究の方法論を学ぶ機会がほとんどないことです。科学の方法論と言い換えても良いです。大学の初年次教育の中で、科学の方法論を教えた経験から言えば、方法論の基礎は高校生でも十分に理解可能であり、かつ、方法論を学ぶことによって、探究的活動の質が相当上がるだろうと思われまます。

6. 第4章の(6) 今後の県立高校の学科等の見直しや、高校再編に関する学校規模や基準などの基本的な方針について。引き続き検討の場を設け、丁寧に検討を進めるということですが、具体的に新設する学科やコースを検討して欲しいと思います。また、学科等の見直しについては、職業系専門学科について小学科を大きくくり化していくこと等も含めて検討して欲しいと思います。また、県立高校の学校規模や基準については、富山県教育委員会においては、「県立学校教育振興計画基本計画」平成19年のものですが、それ以降、令和2年の再編統合に至る間、県立高校の規模と配置のあり方に関して、実証的なデータを踏まえた精力的な検討が行われました。その検討の質は全国的に見ても卓越していたものだと思います。そうした検討に基づいて、県立高校を1学年4から8学級とするという原則が確認され、それに基づいて再編統合が行われたと理解しています。その際の再編基準等は引き続き維持されるべきものと考えます。或いは再編基準等を変更する場合には、新しい事態の出来状況や、新たな実証的データを提示した上で、十分に検討する必要があります。

(委員長)

まず、このような報告書をまとめるのは大変な作業であり、コメントするのは簡単なのですが、これを作るのは大変ということで、教育委員会の事務局の皆様が大変なご努力でここまでのものを作り上げていただいたことに感謝申し上げます。

その上で、先ほどの話の続きになりますが、今後に残された課題は大変重要なのだらうと思います。大きな高校再編が2回行われ、今回はその総まとめみたいなフェーズだと思います。その間に新型コロナをはじめ、大変大きな社会的課題が次々に起きました。現在、ウクライナ戦争で大変なことになっているわけです。そうするとその繋ぎの位置付けかと思しますので、残された課題をここでしっかりまとめて次の委員会に引き継いでいくことが重要だと思います。

本質的に考えて矛盾していると思うのは、例えばスクール・ポリシーです。制定しなさいと文部科学省から示され、作って頂いているわけですが、例えば私学の大学だと創立の理念があるからいいのですが、県立高校におけるスクール・ポリシーとは何かと。例えば校長が変わるごとに変えるのか、校風は誰が作るのかと思うわけです。それからスクール・ポリシーで特色ある教育を進めたら、以前議論があったように普通科の学区の考え方と矛盾することになります。各学校で独自性を持っていたら、砺波地区の生徒はここしか行けないというのはおかしいでしょうと。本質的にスクール・ポリシーを進めて、各高校なりの特色を強めなさいと言われた時に、公立高校はどのように考えればいいのか。人がどんどん変わっていくので、誰が校風を作っていくのか。その本質的な矛盾に対して明確な方針なりを、富山県の教育委員会の方や教育に携わる皆様がよく分からないまま進めていってしまっているのではないかなと思うのが正直なところです。どういう形にしていけばいいのかを、今は各校長先生なりが学校で話をされて作られたと思いますが、本当にそれでいいのかと思います。どこまで各高校の歴史や設立の背景を踏まえたスクール・ポリシーになっているかということの検証も必要だと思います。文部科学省からの様々なご指示と実際に県立高校、公立高校が多いという特殊性の中でのスクール・ポリシーや学生、今までやってこられたことも含めて、本質的な矛盾があると思うので、それをどう解決していくのかということが非常に重要になってくると思います。

それから多様性についてです。ICT、ITデバイスを用いるGIGAスクール構想の大前提は、多様性を担保するためにITデバイス、ICTの力を使いましょうということだったと思います。ですから、ICTを使って多様性に対応する姿勢をもっと打ち出していただく必要があるのではないかと思います。私事で恐縮ですが、この2年はほとんどすべてWeb会議です。年間30回ぐらい、すべてWeb会議でこなしています。実際、それだけWeb会議をやった感じで言うと、大体1回1時間から2時間で全く支障がないと思っています。資料は事前にネットやメールで送っていただいています。ですから、これをもっと学校現場に取り入れることを考えていく必要があるのではないかと思います。そうしなければ、小規模校に対応できません。IT、ICTの力を使えば、小規模校だけで、やっていけるのではないかと思います。例えば2、3校を繋いで、メインの高校の先生が授業を行い、あと2校の方は聞いている。そしてインタラクティブに授業をやることを実際にやろうと思えばどれだけでもできると思います。その上で小規模校のうち、設備の寿命や校舎がもうそろそろ危ないというのであれば、そこは閉じて統合していくということで、むしろ設備マターとして統合を考えていけばいいのではと思います。社会資源を無駄にしないためにも、そのような本質的なICTの使い方をすること。また、学校教育法上の様々な制約や制限があってできないこととの折り合いをどうするのか。そのためには、国、文部科学省の方への提言も必要でしょうが、そういったことは教育委員会の皆様に、大変お忙しいとは思いますが、生徒のためを思って、そして富山県の教育のためを思って活動していただければ、こんなにありがたい、いいことはないのではと思うわけです。

実際に丸2年間、数十回、Web会議をやってきて、何ら差し支えがありませんでした。これは教育でもおそらくそうではないかと思います。ですから、ICTを使用する上での新しい考え方ややり方というのを富山発で、コンパクトな県ではありますが、進めていただければ、富山県としての強みがより一層発揮されるのではないかと感じました。

そういう意味でまとめとすると、大変素晴らしい報告書にまとめていただき、ありがとうございました。そしてまた、委員の皆様にも大変お力を発揮していただきました。アドバイザーの皆様も当然でございます。その中で、この残された課題というところを少し項目を立てていただき、詳述していただいて次の委員会に繋いでいくということを心がけて頂ければ、より一層すばらしい報告書になるのではないかと思います。

5 教育長挨拶

議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を事務局へ戻した。

(事務局)

最後に教育長が一言ご挨拶申し上げます。

(教育長)

本日は第8回のこの検討委員会に、非常にお忙しい時期にもかかわらずご出席いただき、非常に活発なご議論、貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。また、大島アドバイザー様には、第3回の委員会に引き続き、本日も非常に貴重なご示唆をたくさん賜りまして心より感謝申し上げます。

これまで8回検討をしていただいていた、この検討委員会の取りまとめ(素案)をご提示いたしました。基本理念として、ウェルビーイングの向上を掲げ、また3つの目指す姿、6つの方向性など、基本的なところの整理をし、委員の皆様から概ね評価をいただき大変ありがたく思います。本日も貴重なご意見、本当にありがとうございました。

ただ、まだまだ残された課題があることは本日のご意見もお聞きして、新たに認識し、今後に向けて頑張らなければならないと思っています。報告書の記載ぶりについて、非常に具体的なご指摘をたくさん頂戴いたしました。一つ一つを申し上げられませんが、この会議での検討内容との整合性、またいろいろなスタイル、正確性など、たくさんご指摘を賜りましたので、今後しっかりと反映させていただきたいと思っています。

また、「多様性への目配りがもう一工夫要るのではないか」といったご指摘もその通りかと思っています。外国からのエンジニアのお子さん、障害を持っている生徒など、いろいろな生徒がいますので、誰一人取り残さないという理念をしっかりと細かな視点で、もう少し書きぶりを再点検したいと思っています。

また、学校が社会に開かれた存在であるようにという方向性についても多数ご指摘いただき、本日は地域に加え、小学校や中学校との連携についてもご指摘をいただきました。すでにそういった取組みをしている高校もありますが、それがさらに広がるように、この報告書においても少し変えていく方向で検討したいと思っています。

また、壁を取り払うというお話がありました。少子化が進む中で、これまでのように学校や学科などのいろいろな壁を前提に考えてはいけないというご指摘もいただき、方向性もその通りかと思っています。ICTの活用によって、空間を乗り越えられるといった方向性も今後進んでいくと思っています。例えば、小規模になった学校もICTを使えばそれぞれの授業を受けることができ、何とか成立するのではないかとことはあると思います。今の制度上では、授業をする側の学校があり、受ける側の学校もありますが、結局のどこ

ろ授業を受ける方の学校にも、その教室に先生がいなければなりません。そうすると、小規模が進む中で、あちこちに先生がいなければならないという制度になっています。そういった制度的な見直しも、今、国の方で議論が進んでいるようです。そうしたことも見ながら、壁を乗り越えるということも十分念頭に置き、ICTのより一層の活用も踏まえて、今後の高校のあり方を考えていく必要があると思います。

また、他の壁ということもあるかと思いますが。これまでの議論でも、「何学科だから」「何コースだから」「ここでこれしか勉強できない」という生徒への細かい縛りをなるべくなくせばいいというご指摘もたくさんいただきました。そういった方向での工夫をしたいと思いますが、実際のところ、今の段階では制度上、例えば何学科であればこの科目をいくつ取らないと認定されないという縛りもあります。そういった中でどこまで柔軟性を実現できるかということも、少し工夫をしていきたいと思っています。

この報告書については、「3、4年ぐらいはよいが、その先には通用しない」というご指摘もいただき、確かにそういった面はあると思っており、肝に銘じたいと思います。

来年度の取組みとして、県立高校のオープンイノベーション支援事業というものに取り組むことにしております。これは具体的には、教科横断的な学びや地域課題を学ぶ活動の実施にあたって、いろいろな繋ぎ、調整をするコーディネーターを新たに教育委員会に配置したいと思い、そういった予算も盛り込んでおります。こうした探究的な活動を充実させようとする、これまで教員が頑張ってきたところにますます大きな負担がかかるので、これを何とか支援したく、コーディネーターの配置も新たにお願いをしているところです。早速できることは、来年度から取り組んでいきたいと思ひますし、これまでも外部人材の活用をしており、さらに進めたいと思っています。

「富山の持っている良さということも書いてはどうか」という励ましの言葉もいただき、ありがたく思っています。確かに課題はたくさんありますが、これまでの良さも生かしながらという視点が大事だと思いますので、検討したいと思ひます。

まだこの報告書は未完成のものだと思っていますので、これを基に、残された課題について来年度からしっかりと取り組んでいきたいと思っています。この報告書や委員会における検討についても、この後パブリックコメントを行った上で、できれば来年度のなるべく早い時期に最終の検討委員会を開催し、最終取りまとめというように進めていければと思っていますので、委員の皆様方には、どうか引き続きご指導、ご協力をお願いしたいと思います。本当にありがとうございます。

(委員長)

委員会のミッションではないのですが、初回の頃から複数の委員から学校マネジメントについて意見が出ていました。この委員会は結局、何を教えるかや学科のあり方などにフォーカスしていますが、現実には社会とのあり方・接点を教える上でも、教員の皆様にリスクリングしていただかなければなりません。教員は割と閉じた空間の中にいるイメージがあるので、学校マネジメントや教育マネジメントの体制をどうするかということも、残された課題の中にうたっていただきたいと思ひます。

最近、独立行政法人に関して多かったことは新たな基金の運営です。行政の方は大学ファンドなどのいろいろな基金を作ることを好んでおり、その基金の運営が独立行政法人に

下りてきます。例えば、新たな政策目標に予算がついた場合、それで基金を作って運営してくださいと言われます。そうすると、人が増えない割に新たな基金の運営業務が加わります。評価制度委員会では「既存のものをやりながらこうして下りてきたファンドの運営ができますか」「もっとメリハリをつけて、プライオリティが低いものはもうやめるというような中期目標を作らなければ、現実として運営できません。ただ丸投げになっているだけです」という話をよくさせていただいています。これと同じように、これだけ課題が増えた中では、昔からのプライオリティの低い仕事を減らすことをしなければ、教員や教育委員会の皆さんは大変で、大きな課題に対応できないのではないかという気がしています。

この委員会のミッションではないのかもしれませんが、学校マネジメントの視点はぜひとも残された課題として、取り上げていただく必要があるのではないかと感じました。

教育長のお話の後、コメントさせていただき、大変失礼いたしました。

6 閉会

11時40分、司会が閉会を宣した。